

淡き夢

泥りん

月がにぶい輝きを放つ、濡れた地面はぼんやりと明るくこの世を照らす。今日一日あったことをこうして日記に書きとめ、さあ寝ようかというところ。電気を消して空を見上げると相変わらず光がこちらへ差してくる。まるで自分の嫌なところを照らしているかのように感じるが、あくまで月は月である。高い空にあって一切の感情を寄せ付けない金属のように煌々と輝く。

「月ってなんだっけ、そういえば小学校の国語の教科書でハリネズミと月に関する物語を読んだなあ。あれ題名なんだっけ。」

そんなことを考えているうちにウトウトと寝てしまっていた。

場面は変わり夢の世界へ。自分は今、望遠鏡をのぞいている。拡大されているのはさっきまで見上げていた月だ。よく目を凝らしてみると、道路のような直線が伸びている。その上を人のような者が歩いているではないか。

「なあーんだ、宇宙人はいたのか。」

などと妙に納得した。少しレンズをずらすと砂に埋もれたピラミッドが見える。自分とは関係ない世界なのになぜか懐かしい。哀愁さえ感じる。夢はそこで途切れ、気が付くと時計は午前三時半を指していた。青暗い室内、月明かりが照らす。いつのまにか月は大きく移動しており、まるで瞬間移動したみたいだった。台所に行き、グラスに水を注ぐと、月の光へあててみた。水面がキラキラと光り、妖しさをたたえる。それを一気に飲み干すと、普段はこの時間帯に起きていることは少ないので、外に出かけることにした。まだ夜明け前の辺り一面ブルーの世界。眠った街をあてもなくさまよう鳥のつがい。点滅する信号機の下には車は通らず、閑。狭い路地に入ると雑草は朝露に濡れて、ところどころで虫の声が聞こえる。小さい頃はいつもここが怖かった。薄暗くて人通りも少なく、左右にある民家は古くて得体がしれなかった。なので、遂にこの年齢になるまでこの路地を抜けたことはない。その先は思いもよらないところだった。どうやらいつもの正面からの道ではなく、横にある細い道からきたらしい。昔、よく遊んだ境内。なつかしい思い出と共に思い出されるのは、いつも一緒に遊んだ異性の友達のことだった。今、一瞬人影が動いたような気がした。木の下にたっているのは、小さかったとき憧れでもあったその人だった。お互い何をいっていいのかわからず、目を合わせたまましばらくの時が流れた。軽く会釈しておずおずと近づく。永い年月は二人の間に親しさを感じさせない距離をつくってしまっていた。

「元気？」

「うん、元気」

「こんなところでなにしてるの？」

「月。満月だったから、ちょっと。」

「いまなにしてるの？」

「今？うーんとねえ」

「アドレス交換して」

「うん。いいよ」

「俺、東京に住むことになって。」

「そうなの、じゃあ当分会えなくなるね。」

「じゃあね、元気で。」

「うん、またね。」

「待ってるから。」

「えっ。」

「・・・さようなら。」

「待って、俺、昔からずっとお前のこと好きだったんだ。」

あの日からずいぶん経ったが今でもここへくると思い出すのは、淡い夢。理想化された残像。心のかげら。遠くから祭囃子が聞こえる。照りつける太陽。それを和らげる鎮守の森。石段にしみいる蝉の声。昔からかわらぬ季節の移ろい。「ワッショイ」の掛け声も段々と近づいてきて、途中で歓声があがる。祝儀袋をもらったようだった。

「昔から変わらないね。」

「えっ。」

「この町も。」

「びっくりした。後ろから話しかけないでよ。」

「今からでも遅くないかな？」

「今からでもって。」

「昔の約束のこと。」

そのとき蒸し暑かった境内に、一瞬の風が通り抜けた。